

フリードリヒ・キュンメル 著

## 『道徳教育』

—Friedrich Kimmel, *Moralerziehung*  
(Hechingen 2009) —

### 下 程 一 息

教育界の現今の混迷状態はそれこそ目を覆いたい。その主因は西欧の伝統の崩壊と世紀の急転換にありはしないか。ますます深刻化していく、理想と現実、理論と実践のギャップを埋めていくにはどうすればよいのだろうか？ この問題に直面したとき、教育者は途方に暮れてしまう。著者はこの焦眉の問題を以下のように教育人間学的・現象学的に考察している。

道徳教育がその「場」としなければならぬのは、具体的な人間関係、共同生活、ひいては個人と社会とのかわりである。それはともすれば権威と個人との対立の場となる。親子関係、学校、社会制度等の共同体と個人

との間の抜き差ししない確執は、その常例である。事態を收拾し権威を維持するために力行使するならば、一時的に秩序は回復できよう。けれどもほんとうの改善とはならない。解決というには程遠い。むしろ逆効果である。権力は代理不可能な個人に対する暴力となる。暴力は反対の暴力を、秩序の強制は新たな無秩序を生み出す。疎外状況は逆により強化されてくる。教育者は、絶望と諦めというフラストレーションを肌で体験しなければならぬ。「挫折」は「日常の凡庸性」(ハンナ・アレント)となる。教育者はここで匙を投げてはならない。あくまでも変動していく現実に着目して努力し続けなければならぬ。問われてくるのは、責任感に裏付けられた教育者の良心であり、忍耐力に裏付けられた「教育への勇氣」である。教育者はここで「運命愛」の精神でもってこの自己自身を受容し、教育の残余の可能性を模索しながら自己自身を変えていかなければならない。とりわけ政治では根底的な改革は不可能である。要請されてくるのは、「自己変革」にほかならない。教育はこういう実存のぎりぎりの場をその理論と実践の原点としている。このような「現実性の原理」(Realitätsprinzip)ぬきに道徳教育は考えられない。

教育者はこの如何ともしがたい現実を直視し、理想と現実、理論と実践との間の「矛盾」を存在の「複合的全

体」としてまず把握しなければならぬ。そのときに認識されてくるのは、正負両極の相互相即的緊張関係であり、引きずりこまれるのは、相対主義、ひいてはニヒリズムの螺旋状の迷路である。ここでアリアドネの糸とならねばならないのは、この光なき現実に対する洞察力であり、対立矛盾のより高い次元での創造を目指す弁証法的認識である。

「人間存在は究めがたい」(フレスナー)。価値は多元的である。この事実を踏まえた上で真の教育を模索していくことが、今や道徳教育の喫緊の課題となっている。その端緒を開くのがじつは「対話」(Gespräch)にほかならない。「対話」は道徳教育の鍵概念と言わねばならない。

対話の場において教育者はまずは自己とは異なる相手の身になって考え、耳を傾げるだけの人格的余裕と包容力と、同時にまた、相手との一定の距離を置き、適切な批判と判断を下すだけの知的洞察力を身につけていなければならぬ。したがって、相手との距離は「近くて遠い」。こういうパラドックスによってこそ、教育の場での真の信頼関係は確立可能となる。対話は、こういう「信頼」(Vertrauen)によって現代の要請に応え得る「多次元的」なものではなくてはならない。このような対話によってこそ、人間は目に見えないかたちで究極的な

価値創造に参与していくことができはしないか。道徳教育はこれを理想としなければならぬけれども、現実には現実である。実践の道は険しく遠い。瞬時的な観念論に走ってはならない。試行錯誤がつねに付きまとう。忍耐強く時の解決を待つのはかたはない。したがって、差し向き必要となるのは、出来ないことと出来ることを区別した上での折々の事態との「弾力的」(elastisch)な対応であり、理想と現実との間の聡明なる「調停」(Ausgleich)である。これを道徳教育はその実践原理とすべきではないか。「現実との生きた接触」を第一義とする、道徳教育はこういう相互協調を当該目標とすべきではないか。その一具体例として挙げられるのは、愛と労働との関連性である。愛はときに快樂に陥り、性の毒矢となる。また、産業社会においては労働力の搾取は今や未曾有のものとなっている。こういう否定的局面を知悉した上で双方の営みを健全化させるためには、金銭による経済的保障の裏づけをも必要としてみる。利害関係は無視できない。価値創造は現実的に保障され支えられたものでなければならぬ。こういう健全なバランス関係の回復ぬきには、道徳教育は実施不可能であり、その場で要請されてくるのは、こういう「中庸」の美德である。著者を師友としている、日本道徳学会会長横山利弘氏の立言を借用するならば、教師は「知・情・意の働きに目を

向けた指導<sup>\*</sup>」をしなければならぬ。

<sup>\*</sup>『ポプラ』(関西学院通信 No. 64, 二〇〇九年)一五頁。

以上がこの著作の要諦である。全体は、ホルノーの『実存哲学と教育学』(Existenzphilosophie und Pädagogik, Stuttgart 1959 邦訳 理想社一九六六年)を現代の精神状況を踏まえ敷衍し、適宜批判を交えながら補完したものと見えよう。ホルノーには見られぬ新機軸としてまず指摘されねばならないのは、道徳教育の社会性と家庭の問題に関する入念な分析である。問題の弁証法的解決は、ホルノーよりも鋭い。しかしながら、たとえばアドルノの場合のように、因襲化した社会と文化を絶対的に否認することによって、彼岸のユートピアを望見するところまで弁証法を徹底的に駆使してはいない。また、たとえばティリヒの神学の場合のように、人間の魂の救済の問題をキリスト教の「信仰」という精神の絶対的な次元で取り上げようとしてもしていない。以上の問題と何らかのかたちで関連してくる筈である「エロス」の問題ももっと詳述してほしいと思う。したがって、問題とあくチュアルに取り組みながらも、物事を究極の根底にまで問い詰めようとしていないのではないか、という疑問も生じてこよう。とにかくその一步手前のところで止まり、二項対立の中間での調停とバランスの回復の必要性

を力説しているところに、著者の教育哲学の顕著な特性が見出される。

問題を最後まで問い詰めていくためには弁証法に徹しなければならぬ。マルクスが力説していたように、ラディカルであることは根底的でなければならぬ。だから、キウンメルは甘いという思索家も場合によってはいるかも知れない。けれども反面、著者キウンメルは教育者として現場体験重視に徹しているが故に、論旨は具体的に説得力がある。誠実な教育者は各頁を絶えず首肯しながら読むに違いない。諸問題の諸関連を基にして繰り広げられる体系的叙述は、きわめて現象学的である。ここで手にとるように看取されてくるのは、著者の恩師ホルノーの学問体系の支柱となっていた生の哲学とドイツの伝統的ヒューマニズムである。キウンメルこそは、恩師に対する敬愛と批判によって言葉の真実の意味でホルノーの正統な継承者となっていた、と言えはしないだろうか？

如何にすぐれた学問体系であるにせよ、自己の蝸壺に蟄居しているならば、不毛である。この問題は、丸山眞男がずっと以前に力説していたところであるが、「孤立した現象の孤立した観察や評価は危険であって、高度に文脈的な、また全体的な考察<sup>\*<sup>\*</sup></sup>」の裏付けを必要としてい

る。今や国際化は「時の要請」(ゲーテ)であることは言うまでもない。ここでまさに必要となってくるのは、文化の異質性と同質性を全体関連的・具体的な解説を目指す、国際間の「共同作業」である。このことは、モラロジーに関する昨年夏の国際学会ですでに再確認されてきたところである。キュンメル教授の道德教育に関する著作がモラロジーに関する今後の研究にきわめて貴重な一石を投じてくれているわけで、本書のこういうアクチュアリティを最後に指摘しておきたい。

\*丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』(未來社 一九六八年 二八四頁)。

## 付記

元関西学院大学教授の下程息先生が本書評で取り上げられた元ロイトリンゲン教育大学教授フリードリヒ・キュンメル博士の『道德教育』(Friedrich Kimmel, *Moralziehung zwischen Wertorientierung und Wirklichkeitsbezug*, Vardan Verlag, Hechingen, 2009) は、キュンメル博士が、昨年(平成二十一年)八月二十四日から二十六日にモラロジー研究所で開催された「モラルサイエンス国際会議」(統一テーマ「倫理道德の理論と実践——モラロジーにおける廣池千九郎の業績の評価」)に参加された際に、廣池幹堂理事長に手渡しで、モラロジー研究所に寄贈された数冊のご著作の中の一冊です。

\*

キュンメル博士が「モラルサイエンス国際会議」に参加されることになった経緯を簡潔に述べておきたいと思えます。

キュンメル博士は、京都大学名誉教授でモラロジー研究所顧問をされました故下程勇吉先生と、深い学問的親交をもたれたドイツを代表する碩学の一人であり、下程勇吉先生の三つの論文を集め、御子息の下程息先生とキュンメル博士が翻訳に尽力されて成立した *Drei Prinzipien der anthropologischen Pädagogik (Quelle &*

Meyer, 1971) に、訂正・輔筆を加えて、全体を一層充実したものにして出版したいという計画を立てておられました。その改訂版には、下程勇吉先生の代表的著作の紹介を収録し、それら著作に込められた下程勇吉先生の教育人間学の精髓が明らかになるようにしたい、との構想を抱いておられました。

取り上げることとなった代表的著作は、『二宮尊徳の人間学的研究』（初版一九六八、増補版一九八八）、『宗教的自覚と人間形成』（初版一九七〇、増補版一九八八）、『吉田松陰の人間学的研究』（一九八八）、『中江藤樹の人間学的研究』（一九九四）、『日本の精神的伝統』（一九九六）、『廣池千九郎の人間学的研究』（二〇〇五）であり、これらはすべて廣池学園出版部から出版（現在は麗澤大学出版会から出版）されているものです。

キュンメル博士の計画は、下程息先生が仲介され、道徳科学研究センターの岩佐信道センター長から廣池幹堂理事長に報告され、理事長から、モラロジー研究所で下程勇吉先生の御指導を頂いた、北川治男教授（道徳科学研究センター客員教授）、諏訪内敬司教授（杏林大学教授）、そして、立木教夫（麗澤大学教授）の三名で協力するようご指示がありました。

その間に、下程息先生は、お父上の著作を熟読され、下程勇吉先生と廣池学園・モラロジー研究所との深いつ

ながりを理解され、次のように方針を明確化されました。「ところで亡父の著作『宗教的自覚と人間形成』、『日本の精神的伝統』、『廣池千九郎の人間学的研究』を精読、その関連で『伝記 廣池千九郎』を読みましたが、ほんとうに立派なお仕事、尊敬と事実の尊重が一体となってこの不世出の教育者をじつに分かりやすく活写されているのに頭がさがりました。今度の共同作業では父のドイツ語の本にモラロジーの創始者廣池の学問体系を全体の柱石のひとつとして組み入れていく必要がある、と気付きました。」

下程息先生から、夏には、キュンメル博士ご夫妻が京都に來られるとの連絡を頂きました。キュンメル博士は、下程勇吉先生がお元気な頃、一緒にモラロジー研究所を訪問されました。第一回目は、一九七八年十月十九日から二十三日まで滞在され、「現代の道徳教育の問題と道徳教育の形式」と題した講義をしていただきましたし、第二回目は、一九九五年八月二十八日から三十一日にかけて開催された「第二回道徳教育国際会議（二十一世紀の道徳教育を求めて）」の発表者として、「ドイツの道徳教育」と題した発表をしていたというつながりがありましたし、また、下程息先生は廣池千九郎関係の文献をお読みくださり、理解を深めていただいている最中でしたので、廣池千九郎に的を絞った「モラルサ

イエンス国際会議」にご出席して頂けたら、国際会議もさらに充実するのではないかと思ひ、岩佐信道センター長に提案いたしました。幸ひ、許可を頂くことができ、下程息先生とキュンメル博士ご夫妻の日程等を調整していただき、招待させていただくことになりました。

国際会議の場で、下程息先生は、キュンメル博士のドイツ語の通訳をしてくださったり、一般参加者の理解に資するよう配慮された、適切な質問やコメントをして会議を盛り上げてくださいました。また、キュンメル博士は、深い洞察に満ちた発言をされ、会議のレベルを高い水準に引き上げてくださいました。さらにまた、キュンメル夫人は、多くの参加者と親しく交流され、会議の雰囲気明るく楽しいものにして、大いに会議の成功に貢献してくださいました。

キュンメル博士は、この国際会議に招待されたことに對する感謝の気持ちを、何冊かのご著作を研究所に寄付されることよつて表現されました。今回、下程息先生の書評に取り上げられた *Moralziehung* (『道德教育』) は、その中の一冊です。下程息先生は、「この本について、「手前味噌のようなことを申しますが、亡父の教育哲学との間の共鳴音が行間からつねに聴こえてくる、キュンメル先生に下程勇吉は多大の影響を与えていた、キュンメル先生がわれわれの共同の仕事の結果的には提案

されたということになった経緯が、手にとるようには分かりました」と、メールで述べておられます。最後に、キュンメル博士が廣池幹堂理事長に献本された *Moralziehung* を書評してくださいました。下程息先生に深甚の感謝を申し上げます。(立木教夫)

(役職名は平成二十一年度当時のものである。)